完

へ利4
60

へ 4
60

利 門 號 60 巻

愚秘抄 鵜本末

それ和歌と歌ハ人の心を種としてことくもまことの道にて侍る也
まことにへすなはちにもあらぬ姿ハつくしてさとりたる道へすなはちにて
もその深き心をさとりたる事ハ人の数にあらすへからす秘とせ
ら此道へしる趣ハとすれハなかなか此世道ハことにさとりたるへきる事を
是へ侍る人の数乃入らんすとまもなるそしかるハ人なくてハ更
へしかす柿本の翁一境にあらす人のすとはきぬむかしよりて
又よひとつなしさるにやいましへなを今にかなひてけたたにいかりむ
ら此道をいいられるし其粉をあらく育る好士にしく侍る中に此を
さそせんと云へからとえんとるさ侍らちにあらりて何らへ一途よ
あらすれの庭訓家くにたるまてらし大旨ハ一なりといへともまた数のうたに
れさるくの気韻をかまへて進退ハ定侍るこちの其ハ摩形代用て

かくれなく見え侍りまゝに侍し哥の風躰をみて勝劣わかり何れも
一貫をなしくらからんはきこゆるましといふ玄妙しきことに
貴賤ともに此分をへだつなや先十躰とて古くも定め置て侍り彼
十躰をもとゝして猶風姿は無しなましふきに今いふ十八の躰なり是
このほか躰といふもと白躰　秀逸躰　物哀躰　強力。
躰存直躰一具躰抜群躰花麗躰行雲躰廻雪躰理世躰撫民躰
至極躰松の躰竹の躰高山躰澄海躰不明躰これらの姿なる事いっ
れる事にこれへと定め申し事は先しる位ならにて侍りされは古
人も分明に名残付ることをは如くしらぬことにはあらすやとかきちかと書
さしあたるかしも猶侍らす愚老も終にさあらんと存すはゐりえぬく
侍れ先文悦はそれそと申さんこし侍れは吃然として筆のをさし
をされ侍り他にみ十八体をもとめ十躰に合てん詞の位を弁へ申し候
へし一義あるへき申しむ

幽玄（行雲 廻雪）　長高（遠白 高山）　有心（物哀 理世 不明 撫民）　麗（存直 花麗）　事可然
（秀逸 抜群）　面白　一興　拉鬼（強力）
至極躰　松躰　竹躰　澄海躰　けにはさらにあらくしそ
右侍る如く此躰をは十躰に皆わかちしてんえ（もとめ）に見えて十躰に皆
こもりて侍るなれの躰としらん事一体を得さらん哥は思ふ心も又我の姿成
存せんを此躰の哥とは申へきにや或人の如く松躰竹躰澄海躰是
和哥の中に撰ひ出さは別ても又さあせしむるかしく正しき哥なされ
よし具ある姿成り躰とすへしと云りそれはまかりても猶此躰にや
松躰はまんたくこにしくされへくそろへすつよき姿成松躰と云
申侍る事竹躰は姿をたゝしくさしたる派を教をたつ定色ありて
志うも松躰の如くに別当も同しからんあまくいを申こそ澄海躰
はかしんとくれなる物にて只有のまゝのすかたを平懐に読なしる

か又まの事し混をぬきくわりて跡しけなきうたとのゝしあへるはいかにいひ
志りてさすらに気しうけかうしき事ゆやゝ侍るへき

君か代の久しかるへき例には神そ植ゑける住吉の松

けしきや此体みけりて侍らんしけ歌とも見て沼うへしと云人の侍るは
御下の事ありてや侍るへし

秋風にたなひく雲の絶間よりもれいつる月の影のさやけさ

此体とやか侍らん

備りなき世こせいかゝ斗人のくらふ嫉しかるへし

これや澄海体にかゝるよし哉て侍らん但またいふ此すちれらんへぬ
事にて侍り
幽極体をは先達も定めかねて侍りしにもしたやすからしと其
先人侍る後の幽極はさうへきやうやいかにしてえらるゝをもきれ也

抑此しらさせ給ん数はいまくに申さん人にわきさるへし云文治
の比洞まてけ此の好士等数寄めし侍りそて此体を御定免
ありしに亡父申侍るは幽極体は有心体をや申侍るへし但有心体まて
わきまへの姿共よくしく侍めるなれとも詞のおほやうにてそれゆゑ
侍けなくしてさかりし面白体みへてかなしくにもぬきめつらむとおほえ
さうまを申へきまやとなんか申と侍り凡を後え久の御治世よ又此の
哥仙等をと召集てさへの御沙汰ありし小称達は幽玄体を私家の幽極
とまて申しとやき顕昭は麗体は我申き有家雅経家隆等も幽玄
をと幽極と一同よ申侍しに通具朝臣そ何れを幽極とか申へきやん
なにかくと存する姿十体の中にもいかにて侍り用捨よ進退さかりて
先人はかく侍りれり有心体幽玄体麗体は三体ともよ捨かたし
ときてはこへの侍ゆへと申侍りし拾政殿をきまりに亡父申されし趣を

識よかくなんもとぬへきよしとて愚意にも覚へ侍るなと申侍りし
されハ敵ニ無力と其御気色にておかしましき又愚老も文字によ
りて侍る思ひハ見えさらん所懐をこれと立申侍るへき成実もけれハ有ん
体をのミ至極とす心ハすとなるなれハ皆をかく執心し侍りぬ
殺十躰よりする所の十八躰の中にて躰をわけて侍りぬ今かれ十の体
をハ十体の事はあつく志てけるかんにつきにや幽玄体を一途なりける
幽玄の躰の事とて集たる中よ行雲廻雪の姿是へし幽玄ハ来去ニ行雲
廻雪ハ名号成へしいたる行雲曰雲ハ妓女の迷ひの姿よなるこそれよ
こりても思さしく身ニゆきて蔭雲の月を帯しる夜の気をかさ
えんるたつちれせんとも言とハ下申ゝ又思さしく身をえミてる如く
なるぬる雨もさまやうに廻雪のたゆらぬ風に漂ふハ数ハ現
する姿を廻雪といふハ申しとかや

文選ニ高唐賦云昔先王嘗遊ニ高唐怠而昼寝夢見一婦人曰妾巫山之女也為高唐之客旦為朝雲暮為行雨朝〻暮〻陽臺之下旦朝視之如言故為立廟号曰朝雲
洛神賦云河洛之神名曰宓妃髣髴兮若軽雲之蔽月飄颻兮若流風之廻雪云〻是神女之
けは幽玄一勝を申侍るにも勝の体をも是に比らへて心得へきにや又邪悪
かすみよりれ松杉秋風のかつ縄信12乃松乃志川えをおもふ白波とある
事ハ何れの姿と定申へき申ん是ハ事ハ中道ともいはぬへき美ひと
覚え侍る事をと云又是もそれのかつ乃体ともをき侍りしされそ縁
んけ事をわすよ当とへていへるまハ八旬余りの老翁の白髪なる者徒出て
影菊のこと成れ事の人よりもたとにとされるか錦の帽子かきて紫襟
よるとかくつまよりて草我松乃下れ郷若ふ敢てまた嵐と比くなる信ハす

夕霧秋篠からつく筋ありてあかれしきに大御わた和琴かき
なかしうちわふきくうそふかれて識めかしくいへる云々など
にたれて御門に及ふ事を行れか道を経給ふに守
ありけるに彼の勅答にかされたるは本文かちそなる帥川吉く
涙に立寄りて事ハ侍りし但意偏ハ左迄てこそ作ハすとも
對縁してこそおもはすへきに事ふく侍る故をとりてかる
事なくきさしとかされたるよりとらやかくいふ傳へて
傳れたいうへきや唯雄ハ達奔のためにハ皆無へきく
侍らんさて理世撫民の体とも八呉城堯舜吉朝
延喜天暦の弄しこ此御門の御政たくしく博愛を以
て民をなかて世を治め給ふかんにたとへる盛成へし彼
堯舜ハ一國の尊主王第人寿命く有ん体ハ事本賢主極

こする事の体ハこれなかりき一故に理世撫民の体と名付く
抜群体長高体様も凡歌の本意なれと是ハ只に体一を
存する斗りにて指意のんを忘れたる歌にハ抜群長高
の事にもんのなかるへきにて八体の稀なるハ姿めをよんとして
心を次にしてる歌ハいかれとも志ていふへし有心体とかしハ
んを面みしてまそれひをとうにさる也然るへハ一天をつかさ
とる主といへとも理世の旧規をも省ハす撫民のたすけをも
元ひきハぬ君主ハ唯主位のためまさにたゝ覚而しまさす
体に國主の戒を仰ふといへともんに天子の言ハ紙撫すれハ
治に尸位の譏をまぬかれす是に故抜群長高の事に
たとふへし有心体ハ事ハ志かも詞も姿もいみしくも
てきんうるハしからむも及すして此事故理世撫民の体こ

中ころ堯舜延喜天暦の賢きみかとの御代ハ歌をもて国
ともに民安からん事をのみねかひして世の風俗これハ温恵
昭和乃かハらぬ路ある事なりしかと其体の歌
心あさく侍りしとなん又有心体の歌にもいつれか此姿侍り
よく案し定めしてんハ深くもとめかゝる歌こそ誠しきさん
すてそゝろことを志かし深きこゝろなくめる中にみたらん
とハ同し有心体と申しも至極とすへき事かくして歌ハ
雲を花とい日月を水かゝみにし影ハのんハ深く申すへく
よく案しいるかとそん家のん成へし又有心体まて
此外にもさらにも尤る心を深く流入て物にふれ出るよ
至極の姿とたんハ詞ハいとしい所る哥を誠の至極と申へき
みやこれらの不覚ハこゝろもしくかさまへ知るへし

することのいとはよわきに心ハ誠よ言ひ入れく学ひゆ
かハなとか奥義の妙し志つれさらん但名哲好士乃不よ
しては歌の深きを知る事ハ叶ハぬことにて侍りし是しかる
こと境よのそめる家となしと申て定めをとらむ事ハ後乃
ゆをけりも侍りぬへくされハおしこそやこ侍しめ事に云をとて
さぬハ先哲の金言之又何とそれしと細かに定め申し
たりとも後に愚老かさこそり志れる際まてハ忍ひ聞や
しもく其人ハ人もさとすかる有かしくや侍らん其の制係
をとハ詞よ出ましてや申しへきもつもいつすとも又道を守
也之凡歌の体に凡十八体侍りといへりそれをなかひきき
もくゆけハ二十六篇乃体之必しも二十六篇まてハいつ
てか学ひ得侍らんとて先人も事ともかくれすてし侍しも

いまりに無きのすれくさけるくひろくやすらかなり
ぬれハ節を中したのさかりと成まて侍り但この
中に景曲体写古体そ相存すへきにやとて申捨れし
景曲とハ見様体に属せしむ写古体をハ存直体に寄てん
哉へしここに逸を白体にまかせてへき侍るへしとなんまて
こうてしも景曲体ハ又様体の歌乃ちからも面白く無
有心を忘てに法諱したる姿にて侍るへきにや写古
体ハ存直体の歌此中に細かつよひかるかきしたてて道本の
歌とも更にみえぬかんあしかにさりものの哀かい
そへる数を一ト下不論古風のいやしき姿なく侍ん無よ
やけ写古体をハ神んの旅ハうれしく讃まりしきまて侍り
稽古の後かしはなましく流へきにやいかにも古あかし記

歌ハいよりもせて見れこ
　夕さく秋のさよ風吹なるへし婦かりし人乃古きに見へ侍
是躰よ読よせらん歌を写古体とハ一ト下け歌ハ人丸の歌の中に
随ふ体勝の事と云文なりされ侍りしかなる侍る
　たかさごやとハ思ハなくしも日暮の鳴夕暮ハ立ち侍りけ
是しも歌の本よ成へき事なると見へ侍るましくへきられき
　去りとてそ心されなくにましけれハ是歌れぬあかつき無中
あはれ無りに読ハやしてそ今宮しやされしとさん人ゆつて侍り
きこゆかりと不堪の及ふへき詞にてハよあ沢むりし
今の名歌多く侍れたりこれを撰しさむつこなまき歌の
姿かとえるハ云文卿歌に
　蓮の葉乃露の夜雨に涙なるへて山おとこさ次

志かをなく今はと云秋山の道ちかき小松むしの侶
毎夜中よりこそなけれなり入山の奥にて麻?なくなる
荒涼白秋の庭しるき衣なき面して消なん哥の夕暮
小笹原風まつ露の消争てこのうてしを云へるくるれ
定しともいふるなくて成ぬへしん残する云乃えも聊
雲の上乃春しそ又不忘る此花は数にをこひ出しと
け詠侍しもを常に弄詠し侍る哥になれけの云ひ出されてよ
く懐旧の涸も従来の哀も打ちきなく侍る朝夕をそ
なかれぬ事なく在の故実よるもかはいさゝか侍る事も
なかりきされは唯文字さしむひとく流わし有とする
けりと侍れ哥なんと学しひとくるあふき詠へし
侍たくいまさし?はたるたりに覚へ侍りぬにとかくと

云ふ入棄しのんにをいうてよれ哥もいてたゝんと社
見へ侍りしうされは古今にんは仰くたやすく讀かは紀
姿よりへしは理りにて侍りけるも人哥にねろてなすな
事とていましめられしは忘くしき数いにく侍るき
家志つ流なんといふことはすくき唯常の述懐と讀よ余り
志まてたしいましめもぬを流はわろきにて侍りたる侍乃
哥は哀にと留へ況して節て何余さるまおもんけ
ぬなりとそ花の数をなりかる月乃入をとて今り
うへくこそめをされえたんなりと云哥さてハ秋の夕暮春嘆
にむかひて云事とうく涙の落るなりと云ことゝそしよく
よくすき筆の数いは大つゝ哥のんえへあまうへ哥て
いそうくにも流をきそて侍れはなりと云ん古へを志きに

ともがらの述懐世の述懐或は哀傷懐旧などさし出ては
誰も思ひよるべしされはそれはいふにおよべきこと中に
読すしたるもあらしかして誠したよ得る感も
有べきとや代々につたへもつたへぬも愁恨外よおもり
ぬるはいふかいなく世よめでてもなき論なきためしに
しく侍れは何るは世或は泊川の流れに庭よ沈まんとかたち
何るは花山の雲よ消と思ひとかゝる歎ひもありあらは
哀ふしそ侍る又後世を欲く禅客の花落葉をとりて世
乃無常を悟り我のえかたき身あはしをなぞらへ志して
こゝろしなる恨みむ有れ不立てみをとも華れ寄
あれ泡のゆふしに云ひ様侍る人ハとしもくしい誠よ其
人なれハ身におもひたる述懐いくも侍るへしはやくみよ

恭もなく又親んもあれ人の口は音はんさしを深く流
へきさまにありんえくその事となく落花沈月よ句ひ
く余りに衣ことの述懐となむぬむすハうきされぬ事
にく侍り又古の筆人の手迄て侍る物よ皮肉骨の三体
といふ事或ハあてくれたり右の三体よ此三体をよせて
三得三失とを南事侍る三体とハ小野道風行成亞相
佐理此三人の事三體ハ骨を幸て皮肉の二或ハ流様ハ
肉の一を除て皮骨の二をとるに佐理ハ皮一節を存して肉
骨の有姿或忘れ侍り去除て本体ハ得三不除ハ
失と之ハ道風ハ筆勢もいますはよく見てみよして
中さしく走ける姿或ハ行成ハ走てハありと書て
又やさしくつよさ二或えす佐理ハまさしきさ一体を

さてつらぬきとそへあるすぢをとかくそてつらぬきハ骨そへのるを
肉そへしきハ皮なりけ三体ハ骨とのちて本体とすへきにや
いふそへもかりそへしき姿なるかつらぬき体のなかに人ハ
よろしいふしとぞ見える人の見るにも骨ごとに
歌の根本なりて得れされハいれの道にもつらぬきを旨と
そへき事とそ教なるゝのこ人へ上古の筆諸あてたへ
なりし定まれるなる名一体ハたりとさて三体といふなるへ
てまたなりきこら弘法大師の御筆を三体とつゝる
て手流へるとハやかゝりし得る事も文かくのかし数体
をさく読人有しいしへりなる何れとさなくて
流出しなむへきまやんなかるもうけねとハ似へるに
ますとのゝさやとまきことのこちてよ入なよむハ

三下に分首へ但上手になんぞハいかにもそのさる体
を本として読習ふへきにや三条もかと自在によみ
なれて後数体をいかにも得るへきにしてそ被皮肉骨を
十体に分合せんさハ拉鬼体有心体事可然体
麗体なとを骨になすらへし濃体有一節体面白
体は三ハ肉にうつしとるへきにや長高体見様体幽玄体
けは三をハ皮の体にのそめ得へしけは三体を何れもく
いろさす読出く得んらハ大師の御筆にいは
得るへきこされハ弁人にも筆士にもあかれ体を
さくる影ハ上古にもまたかしかく当時もはやく
得しすとも
後彩明にも弁れ無三体とハ十体のうち何れのそなたこ

もみぢちらん音の声にも作ことに流入て侍らんハ中へさと
ち遠てけ哥そ出て
日暮ハ遊人も許しきさ承救岩の嵐の音汁して
こ自然乃哥をいたして侍りされたけ哥ハ主の心ゆ
ゆる體ハすこし體をかね體を存せる哥とこそハ
るべし
故やハちる紅葉に埋れし秋の夜の床に秋風ひや
さハなつかしき哥とこそ見へ侍りしかとて此事なれとも
詩人の言とれ乃や絶ぬ人なりハ乃松に雪ありけるに
小倉山峰を此の朝かしゆかしゆるハ落葉よもれぬ紅葉
見残そさすかにも見へ侍る是又卿もおほつかなき感の道哥
数道来のぬさまハ基俊俊頼顕輔清輔なとまてそ侍るん

其中にも俊頼朝臣ハ古代の燼継にこそ下り基俊清輔
なと観る古の人ハみてあやまちなかりし人こ俊頼ハ上
手にて侍りしかとも余りに離意ますませて讀る
体も有ましき事を常に詠出しして人のそしりをかいとい
し事にて基俊抔ハ世子の中にも心つれき基俊
に先人ハ和哥の体をたてて庭訓絶ぬさまとに侍りし
かハすこしひなき事耳あらましきそれしかと申し何とし
て申ん俊頼朝臣ハ同日の論よりあそうへかうてハ志ひとても
及ましき事にて見へ侍り只俊頼の非ありて先指の債
ぬ事なれたる秋とかてよみ出しして何さうりとなされ
しへそうこそ夫ハいつて郢かしるや俊頼なうとりてよみ
出しうらん歯うしとうなるまし是又の子そつハ違なとい

おそらく末代まても先ハ俳諧の流をしめたりけるなと
いひて本意にせん事又よろしかるましとそ覚へ
侍るたゝ能く心得て其さまある事の出くる意をし
きたゆれ基俊の意ハよそからいひしくなるハ稀なれとも
意ことにあつくみえりて多くしくこそ有りて感けりされけれ
俊頼ハ意流をとるね生ある意斗を流出して基俊
ハ常にいひされける事とこそ人も基俊よりハ
口のまさしく俊頼よりハなかりけりといひされし中ん常にり
俊頼ハ達者かといひされしにして清浦に猶基俊よりも
もまさしき姿形流けるにやされともさひさるさまも
雲泥の事とこそみへ侍る為しの贈答侍れとも
此二人の詠作ハ何れとも見わきかたし唯人の為

むねある姿なるへしむかしハ称かふへ此意さ俺とて
学んへ侍るねもけ肩をあふる人への意此をゝすゝめハ
そのしこらもしにゝて昔にも及ハ中比にもおとへて侍や
らん中みも摂政殿ハ天性不思議の幽玄とみへ侍りされハ
中々学ひかたに及ハ凡人の意味もおよひ甲乙を見ん
方て歌をもすゝまたる中をそ存しく識より先かれ
ましに学んある慈鎮僧正の詠体をハ不堪の志乃学ふ
うつし能ひ侍らすなとも読ひませても其上の詮
なき風体也されは拾遺に揚ともつゝけよすの花結目
をハ存しれけるにや
歌さくら月より思ひある神の雨小雲ハ秋の栄野ハ山端
此の花ハ白ん花ハさしつゝハなれ詠てしらさりしめのゝや

是等ハ皆詠作の趣意こそへ侍る家隆ハすぐれたる歌
よみ常に心にいれていとおもしろき一ふし有しかとも見れ
ある事也姿幽玄なる事ハ申すに侍り定家の体のまことにへ
侍りしか有家朝臣ハことに入る事もさるへき歌も申しき
雅経も格別侍りけるや今ハけしからぬ申しにくき侍りたき
雅経ハとられる事ハ人あれ共よる處侍れハ有家朝臣にハ
師わかきつる方侍るへし／しかれとも世のもてなしハ雅経
をまされるとこそ侍るやらん通具朝臣のハ無下に楽天
の詩なんとを取ちらして侍りさる也ハ摂政なとをとられ
ら寺西ふ寂蓮ハ侍るに候よ寂蓮ハ見えしさる堪能之事
毎に面白く皆の出さるへき也とて申ん骨を存せさる様にて
読出てハ秀能もおよふへきかも侍る秀昭ハ木曽たえたに

して多年道を主とせしあとハ生得の不堪あらく
侍れともさすかに稽古の故かと見えてそこらぬ事へ候
萱斎院二条院讃岐宜秋門院丹後宮内卿亡父卿の女孫
その女事ハすくれて見へ侍るいさゝけしきのことハ入いらん
事をハ有家雅経通具家隆も読ぬきもしくや侍らん
初も西行上人をはしめ乃様さへも見へ侍る天気常ハ
ことの達者とこそて柿本乃再誕なとのよし勅定ありし
にしそ哉人云みちの陵慶もはけしと見へ侍らんと覚りこ
ことの如来て風体を読出して其ありし詠るへ
しとかたる事も生して西行上人の体なれあらん
すハ非器の者ハ皆叶ふましき事にやまゝ又拙き
横平懐にもたゝかいとしう申さにてもかよふへけれ

見し許可一方の事にや幽玄の姿にてしかも有心
体をなせん人は清輔朝臣こそ又奇優なる詠哥をよ讀
ませんは左こそ有りやそれは悪しかりしとそ見へ侍る
さても後徳大寺の左府はたけ高き哥人と見へ侍る古人の
詠作むかしへ較ふるにおもふかぬ哥こそ誠にすくしいなき事
と見ゆるかの詠哥をとふる時そ退屈の心も出来すさるに
けふまし此事にやと見ゆる事も侍る

箱根路を我こへ来れは伊豆の海や奥の小島に波のよるも見ゆ

武士の矢なみつくろふ小手の上に霰たはしるなすの篠原

篠の葉に霰さやきてみ山辺は峯の木からししはし吹ぬ

人麿の哥とも沙汰侍りしに

龍田川紅葉流る神南備の三室の山に時雨ふるらし

此哥を家隆卿のきゝしに嵐吹しもとを中々侍りしは
いまと侍るへきや申さんを時に一きはたかく見え侍りし
きこゆ事を深くしていたしてこそ心を深く妬みしくゐ
時雨れ嵐吹きりしとそ此ハ只一への浅くとも見ゆる哥で成
藤原為家の中に深もされてそ侍る哥ハ只これらの心根を
なせんとよつもとも一事にや
不明体ハ幽玄とかにもしては流えとも此かくし左京大夫顕輔
新しく成へし

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一ツはもとの身にして

是こそ不明体にハ叶ひて侍る愚詠よ

思ひきやとはりし人はつれなくて袖のみ涙よ宿る月かけ

此哥の姿ハ本哥とられる哥共ふまりぬへき事にてこそ又あれ侍

上人の弁に
津國の難波の春ハ夢なれや芦の枯葉に風わたるなり
とられつる世すせの事乃かけらハ涼しく景気乃見
先年十首乃自讃の弁を示れし時西行上人の系しせ
たりし十首の弁乃随一之鴫立沢の弁をハことに似たれ
挑んハ帰りし弁に抑より新古今に始ハはしめ入れたり
しを入ぬと叫ひ抑ハ右撰集んてられとて京へ上りける
又降りぬ立帰りなるとなん故へきさハへらしそ後の入れ
たりしと又一首の自讃弁有
山里の秋乃末にそ思ひしる悲しかりけり木枯の風
御とこひ入ける弁に後乾弁に
うかりける人をはせ乃山嵐よはけしかれとハ祈らぬものを

秀逸のうちに
三方ハ上を北義云々まつらん吹きみたれ雲のあ宿の山風
又思詠して
忘れぬもんうとめしと思ふ家を待まにあはれ何かハ
ある〻ハ上古にし有らく末代とてしらるへきなくいと恥しん
形ハ今世も唯弁の此道ハよらん人の耳に近く姿やさし
きんと思へきて〜し奥義不可得のすら〻ハ末よりあと
あらをせんとせりおはゆき毎しハ上ミりれ法用乃世んたるの
わさ成へし
鶉なくまのゝ入江乃濱風よ尾花波よる秋乃夕暮
夕されハ乃への秋風身にしみて鶉鳴なり深草のさと
此二首俊頼を西に申くへたるに多くハ鶉鳴まのゝ入江の弁を

勝れりと申しあへりけれと下の句たりなかりぬ人のすゝこそ聴く
さびしさは秋の庭こそ哀なれしゆしてはなん露の夕暮
これらは感格ある哥也
志ぬ也て今はと云ふ秋山の遠ざかり行く虫の鳴
音ふとなくと詠しも云ひ出しも哀のふかき事は世のつねにみにせ
まゝやと細々なるを後の人に叶はぬ事のみこそ哀ふ
まじへそとてきし此影に述懐ありと流布し大事成と
財なるの影につれなきを待ちしとぞいふたる杯等
にある哥て然るに女の哥ともいふはきえても待るなん
又ある花橘小風吹て山時雨雲になりけり
ゆんと読る歌は其あはれまさりしと意気さるゝを
と見る花も月も唯それなるへし微妙にいひ入る述懐杯

のせられぬへきにより不及申ますこねとはなからに
読れんと求るもの好く不出ても述懐の影を毎年業すへ
き家術枝まよ雨てたゞ此の枝まゝもをかしと読る古
体一の姿と又それはあはれなる也へし
然れは歌道と云ひてもすくまことを其道にてさんやを見れ
其心を述するんなられは実意にかなひし実意て不叶
ねまこと身に沈み居されは古へより今に至りて道とうろ
くしくせきりし山里は昇進も名誉もなくは
何りしか能因法師の秋風ぞ吹の哥を思ひよりて出て此
哥は其曰中にさしむかへて云ふなる趣きにならひて
披露せん為と洛中の好士等に古妻に出る由
いとゆをとらしいて半年余りふとよ乘ありさと稱せ

携へて来りの板を見れ給ふし入道大に悦ち明て影を見るにあて
てくろめて渡さし出て後はゆかしきものとてしけりと
秘蔵しけるとこ又俊恵法師長柄の橋のかんなくずといふに
として感得し給ひ年比袋に入て所持しけるく
給ひけるを見れ給へとも惜しかりけるく夜深て立ひ
く帯刀節信むかひて語りて見られ給へは俊恵もよろこひすり
をとして出しけるも優なりとてそへられもなく取出しかも
をまくするなこ又檜扇伸が奥州の任にけるく下しとて紀
白河の関過ありて装束立出てすかやうに出立随僕
ともに何とまさせられは傍なるもの是は何なりと云られは
いかにともさしもあるを白川の関といふて見しかりけ
れて通るへきとおもひとや申しけり社給はれ又大貳三位
こるを公任卿三条まで歌の道にて常にもてはやされ紫宸
何まかなる花紬とかいつくろひて後者まへ行向ひ
たるとなるみ大納言の家のこふしひよ知るにもしと云て
知しなりしいかみ何すに申して出され名道し家のすは
つやくいひし出させてあをも貴くさに
こる遠ふ事に
逢坂の関の清水に影見へて今や引らん望月の駒
あな坂の関は岩かど踏ならし山さら出る切原の駒
此歌の首を詠し合せられ給ふに一二篇とは切原の
うしまをりて出へ給ひこ二篇にもあれはとのかくり
清水の事は何さりて出へ給ふはいかなる事にかけ不審
を清存せに兼りぬらんなくまりたるをといひられは

大納言涸を泣かくも任役し給ひけん後十八年と
いふ人稚きハともかくも給ひつるに傳辺の綿りをハする
へきよしなりしを待てしく神妙なりと見へけれはこそと
我か弟の首を奮ひまもらし育て侍りし家よも
侍り要ある弟ハさせるかしもなく今かひきに下せり
切腹乃事は弟ハ云状のよせまたくミにして又ハ元恵の
とるまりかへてき次第に給ふへし去程ハ一二通をハ
まかりて告られたるにきさる事あるへしと覚られたまヘハ
高遠弁うるつきこそ今まても不審なれ給ひし後
ハあつしくき様子ハなしてるかつて書付を記し
きらん弁をハ證文写しき体也ハ心得ずよし給ひて給ふ
かともなくさせる一かしもいえて候者の儀の年ハ誠

せくしとあらんを聞たりしく存ぜへきにしそとて侍り
侍りき翌日に又襲なりしにそ早旦より何かいくて方
のとうしいとなんきて侍りたるとや見えし和弟の事を
弟に而ありに何とそひつくろひて侍るへきとて存うに振舞
たるかや或ハ弟次郎を二死ホ乎まかりたるも挑ふのなき
在かや或ハ没して我兄の跡とて弟ニてありける人の差みよ
ひかれハ動携かり切出したるとやなれ際よそえて思ろしき
ことてそされハ二又々も朋友の出仕稀ニハ堂の命をなき
をしおけきて来内せられし我れらき和弟の御命也て
来られしおハ熊あらんしき装束をうまつへて用あれし
にもえてきりてなく右へしかいなとこよりさ郎々と
寄せし出まハいうしきまにも修理のんなかりんハいたるまし

かくる事にハかみも名をハもてなし作くへきそと申置
れし也衰よりさえへ給る是らの数志まし其後よ不及者
今にも救ひ給へるよしまいそ又公事とて勅撰にも入ぬ事
侍り

是吉丸松の本百より詠れハ月おちかゝる淡路島やま
この事を新古今撰せさせし時御法ありていかにして
今に三代の勅撰にも入れ給りしたんと御不審有し
に一同にけ家ハさしたる郷結をもとしかハ何れそと勅
語ありしに松の本百よりと云詞のつくなきによつて今
まてもれ給りしかやにやと勅答つかふまつり給りしに
さそし是非ハ何とかよみてよろしきと仰られしに否不存と
申上侍りハ松の本百よりと置へきにやと申しかされ

惟なれとも余りにもく咏めるにや恐老ハ松れいまうりと
そゆなきとなさし侍りき何のよろしきもん是非ハ定
めし難く其摂政殿有家朝臣ハ松の色まよりとて宮
よろしかりなんと申されき
又其歌読ハかりそめにも心のしるしてよむ事
なかれ自由なる読るいぬれハいかにも晴の時よまる事
よまれまて承りハ毎度読んさてハ稽古道してうそふ
きてよみぬるか故よせん年仙洞にて老若の勝負の御
歌合南殿にて侍りしに承り出すか五首てつかふまつ
やと勅語ありしにこそ実もとえん給へしかされハ其時ハ
さまさて無遠なりしき和泉式部ハ門かつきて読ける也
晴の時も歌をかくさかみ門入て読ける世よかくハしう

なんみへいるとみゆる中侍へ侍るされとも猶それハ難なる
熟もさらそ何つまゐりしき事ふかする方侍り座る道諸の
毎ハ晴き赤まて流すらひらけるにや何っもこ見し中大
をそむきて目をとこちく楽しく侍るとすん母様ハいろみ
そのうちかくらんハ皇りぬへし母房かうん人のあそうに
流つけたらんハいうにかうりしらん一切の芸さハ志れのうる
りしまくと又皇しまくと申ゞ唯今ハ在席ニしくて
おしあふ向ても又うりかきてもよむへしそれなよく
侍るこ

たゞ今まてに古今の三ケの大事ありとむへしをかたま紀木
めとにけつり花さす何なくさゞ是ぞ此の大事と申侍る
へしをかたまの事家にてしるつる蔵まちくよ侍り

或人の云くをかたま紀木といふハ御門御即位の時三種
の松の枝を取りてこ寸まはりにきりて御守りを
よ小さく（朱にて書之）御首にかけさせまいらせて御即位ありて
後その御まもりを移しくれの老とくれたるを帝乃
生気の方に埋む此木をおかたまの木といふ云々當流
の口傳にをかたまの木と申ハ禁中御庭れ時名づけ付
てあてまつる名のるを木と云其所への御しゆん丹波の
國へ下向し侍りし時何れの山路とてとてえしかハ
紅葉のさとえ色めきて侍りしを草刈ら何りし老
翁に何の紅葉ハ何の木とかやそと問しかハ老翁答て
云あれハをかたま紀木と申こと答しかハ甚たよろこびて帰事
せらる事に定めしく名の木なりとれなからりの口傳に合侍り

しかハ丈よりはしく汁氣をさして侍りめとに名つり花
さすといふ事ハ業平朝臣うつくしきさまつり花を
してある女房の仮名まふ所の妻戸をさうしたり給さ
なん兎といふハ妻戸也志ら川にも花とかハ花くり
花のまこれ侍の氣云著といふ物の名之藤の花割に之左道
のゐ端のひとりの日またとの人〻の絶乃と称り花佳さしく
揚をぞ花きをとりて花〻うくさそ載あとといふ成へし藤の
絶も同さるなれ花藤の絶全てたいうくの女すにゝくさいの
絶いりをいとりといそんたいハ思や左近右近につきて
聊なりひあるもの名り花のかれまさされの絶乃さゝ色
に花をさすをいふ花河にたくさの事をふ救多れ哉
あり或ハ美又ハ川えともと河ゐてそらしを同なくさと

中人侍りお侍云河胃と申茶をと云なるへし是ハ汁れ
されるし汁石の山玉極家の重事之大女とく汁方学を
人〻く諸すうすうれ物もく共まにをわて丞庭を出す
する不可有是住吉明神の御浩ままよそりて且比の
用心をまもつくぬる成へしとと

干時建保五年七月七日於住吉御前参籠之次聊所注付之
且思道之故且憐子之源之仍清老眼不堪宣一両八言悪淺有多
前中納言藤原朝臣定家　在判

以彼自筆干時寶治元年十月二日

於北山亭書寫了

前大納言藤原朝臣為家　在判

于時以彼本弘長二年八月十日

相傳了

前中納言藤原朝臣為氏　在判

正應三年正月四日件本京極黄門

自筆本共相傳了

侍従藤原朝臣為實　在判

私抄奥口傳前〻抄云

百首の哥進上の時ハ定まりて作者の名を口ハ書也

懐紙ハこのいく常の會れハく下﨟よりそしめて一巻

先披講十人しかめこそ斗りをハ撰者講せて一し家哥を

懐中しく其の哥ともまとゝることの常にハ講師ハ先ん我哥とそ

さハ〻披講されされハ哥とも皆披講終りて御製の

百首を百首あるし流進して披講し懐中より取出て

御前に進てたゝ川へし哥人百首されく撰者の哥を

講することなし　勅ハそれを私とも披講せられ也侍り

私集帝頒七宝合玉錦ゆかしく御手何の趣かしれ

御製のそハみ雲客以下の下﨟をかへまて當代の懐紙

くるしからすかれとも御服分かへし文書取り筆

叙目

當帝の御製を入まゐらせ又其次ハ人麿赤人躬恒の達さ
を入へし其上をハ勅ニ入す法名を付て下ニ入当代なりとも
人の沙て入にハ一二首毎ニ外ニ入置し二代の作を一首も
下入又撰者の哥入ゐ事書にていかれの時よみ侍りしと
其の字を書へ置したゝし人ニハ詞よみ侍りけると
け當乃字を書すなハちひとゝ又表の記ハ端の所上下あらハ
上を半に下を詞ニ哥数を書へし秋の記ハ陰之上下をかく
し所に詞書とつく可し
先陰陽對於天地並並相通の故之哥ハ人之又陰陽逆陽
探の其へらん哥ハ其うし季なりしむを其次ニ有人之意をそ
神意ニ意をつけて仮名序ニ書申したる事を告へ

名にて一まれ其へし古今集にすへらん事をかゝるへし
よし又古今の序にかしの山のさくらし人丸か目にハ
雲かとなん思ひけるとへし人丸の家に桜を雲とよめる歌
古今の中になしされとらしらけるやたゝし花と
雲とみてよめる人丸の家の集にあるを文武天皇よし
此御遊覧の時供奉して詠る雲の色ちらさにもへつらハ
其乃しかのもの桜之かるを新古今の序ニつあかいハする称
其ひ山乃部にと侍るましくし古今集の中にハ風情の
其すりしかハ後代ニハ撰者の不覚に成へしとて其
を御製に遊ハし入られし懐紙の口平勅撰のにて侍るへし
うちたての詞ニやまと其と書すなハちそれ柳桜ニ
懐紙の口平仮名ニ書きまきて古人もあれとも他家の事之

まう、勅撰功終りて後千清書并紙にる檀紙多子なるべし
無紙なよし新古今ハ無紙千載集ニハ檀紙三十枚
行らハ其色不幸ハなつへきに序あらハ一巻に可率其の表
紙ハ難波津あさか山の宗頌を誌すへしられ其小表ハ
こう作者ハその作次くに家とすへし他表紙なんうし
軸ハ必水精可成杯牛露乗のまきにその名をしるふさ
に錦をしき清涼殿かく上の夜のたたに住吉玉津嶋
の神影をかけまうりて沈香たき撰者勅作して両神影
の御前におく先八雲たつの哥三反次に難波津の哥浅さ
か山の哥三反を引て詠すへし後に撰者勅書を添て
先帝と神影の御前にむけてそハみてさて表の歌
其上をとりて始三首をよみ行けて次に此書三首つゝ読進

まへし披講なくて本序よりとる撰者ハ奉行成へし哥
撰者禄をたまハる翌日に家内者くて一部を読進すること
初日にハ別ニ表傷の殿を不読後日にハ皆読へし奏読
の日にも吉ハきみえきみと反ハいのえ乙れと殿氣是
に准してん作へし吉用ハたちのと此用之
當帝撰者裏日除くへし奏読ハ撰者当年の生氣
に向ふへし前帝我向背をいとふれ吉方にむくへし
又懐紙書事一首のちう秘事之指一字九字二字
四字一字とみ行に書下すこと二行七字常れること
哥の口よ作者の名を書もくらしかうすこそよそれ
哥をハ二行七字に可書十首ハ哥らハ二行つき二行かき
にて書くるし二三枚つきらハ二行七字よかき詠何首の

和哥とて女房のごとく明月懐紙にて八月十五夜
九月なとの事又秋日とも書々ハ書日夜日白
揉一書たる詠何首和哥と書ハ不審やうなる寸板構ハ
達者の人ハ書へし懐紙かさぬる中ハうへハ我かなるへし
下ハ上臈一の下御製成迄ハ板構して後ハあとの中に
にまきそろへてをく御用しくてくしめハかりよむ歌
何といふすとよむ

人丸の歌なく事秘すること常ハ人丸これ上手の哥
書しにうしかく留なれ
人麿をと云夫の御歌のむかひふかくつきへむかひな
らそそへりのすちむかひかしらくつきこ又四季れ
これ書ハ東方ハ南ましく人丸赤人の歌あるハ人丸

左赤人右よりけよる事志らぬ人のまへにてハ
中々是を略すへし

阪田氏